

生 *Seikatsu Bunkashi* 史 生活文化

<史料館だより>

- ◇ 深江文化村・古澤家住宅の解体と展示…………… 大国 正美 (2)
- ◇ 予約図書サービス、過去最多更新…………… (6)
- ◇ 深江文化村ゆかりの音楽家の演奏記録について…………… 有吉 康德 (7)
- ◇ 深江文化ハウス居住者健在…………… 有吉 康德 (9)
- ◇ 江戸時代の正寿寺 (2)
戦禍・震災を免れた梵鐘…………… 大国 正美 (11)
- ◇ 深江の心象風景 (4)
深江周辺の風景…………… 岡田 茂義 (16)
- ◇ 史料館日誌抄・資料寄贈者ご芳名…………… (20)
- ◇ 田中邦彦画伯の懐かしの風景画…………… 道谷 卓 (21)

2024.3.31
NO.52

解体された国登録有形文化財・古澤家住宅の階段の親柱と手すり。一部が史料館で展示されている。親柱の丸い彫り込みや手すりの金目地風の装飾はビザンチン文化の影響を受けた色遣いとされる。設計したのは、ウクライナのキーウ工科大学で建築学を学んだロシア人、ラディンスキー。ロシア革命の後、亡命して神戸の外国人居留地の明海ビルディングで事務所を開き、深江文化村の古澤家住宅の南側に邸宅を構えた（2～6頁参照）。



神戸深江生活文化史料館

深江文化村・古澤家住宅の解体と展示

史料館長 大 国 正 美

はじめに

深江文化村にあった古澤家住宅（国登録有形文化財）が、令和五年（二〇二三）十月に解体された。当初十三棟あった住宅は富永家住宅だけとなった。史料館では所有者の古澤弘氏（昭和三十四年生まれ）に接触、神戸市文化財課を交えて話し合いを重ねた。その結果、行政としては部材の保存ができないという判断に至り、史料館で残された部材をできる限り譲り受けることになった。また六枚残された設計図は文化財課がデジタル保存し、現物は史料館に寄託された。特別コーナーを設けて常設展示している。今回の調査成果を報告したい。

ウクライナで学んだ建築士が設計

深江文化村は大正十三年（一九二四）、深江の医師阪口嘉石（たけいし）が所有する神楽新田（深江南町一丁目）の約二五〇〇坪に設けられた。提案したのは、ヴォーリズ建築事務所出身の建築家で、深江在住の吉村清太郎だった。十三棟の建物が内側にあるローンヤードに向き、これを軸にコミュニティを形成する特殊な構造になっていた。吉村の建てた建物に続いて、大正十四年に建てられたのがウクライナの現キーウ（キエフ）工科大出身のL・N・ラディンスキーが設計した古澤家住宅だった。施主の古澤

平作は、ラディンスキーの事務所と同じ神戸・旧居留地の明海ビルにタイヤを扱う古澤平作商店の事務所を置いていた。

その縁で建築を発注したとされ、ラディンスキーも深江文化村に邸宅を構えた。

古澤家住宅は木造二階建てで、複雑な構成を持つ急傾斜の天然スレート葺きの屋根が特徴だった。壁面には大型窓を配し、明るく変化のあるデザインが特色だった。屋内は、一階は食堂、応接室（写真1）、



写真1 応接室の暖炉



写真2 二階の和室



写真4 テラス

いるナラ材が素
材に使われてい



写真3 応接室の観音開きの窓

金目地風の円形
や直線の飾りは
ロシア正教の聖
像に使われる色
遣いである(口
絵写真)。また
階段下に設けら
れた物置の木製
ドアも屋内で統
一的に使われて
いるナラ材が素
材に使われてい

女中部屋があり、いずれも洋間。二階は和室の寢室(写真2)と、ドアのある和洋折衷の畳敷の部屋があり、日本人の生活に合わせて造り分けていた。屋根裏に入ると小屋組みがしっかりとしたボルトで止められていて、阪神・淡路大震災などの災害に見舞われたが、損傷は少なかった理由が判明した。

部材の調査と展示の概要

部材の譲渡を受け、史料館では二階の深江文化村の展示コーナーを手作りで大幅に増強した。目玉は、ピザンチン風の意匠を持つ階段の親柱と手すり。

る。大正期の手作りのガラスの入った応接室の観音開きの窓(写真3)は丸ごと取り外し、カーテンレールを取り付けた。ガラス越しに在りし日の写真をちりばめている。天窓も別置し、手作りのガラスによる反射の揺らぎが味わえる。

このほか建物内部の部材もできる限り集めた。照明器具の覆い(写真1)、マントルピースの火床、ガラス製ドアノブ、フック式のドアのかぎ、襖の金具、玄関ドアの色ガラス、玄関やテラス(写真4)のトゥートンカラーのタイル、外壁、和室の天袋引戸など、細かい素材にこだわった。一階の壁紙はめくると三層構造になっていて、一番下には大正五、六年ごろの年号のある反故紙が使われていた。そのことで一番下の壁紙が建設当時の壁紙で、その後二回にわたって壁紙が張り替えられたことも分かった。

追跡調査で製造元が分かった部材もある。浴室タイルの裏には「DK」のマークがあり、調査の結果、淡路にある淡陶株式会社製と確認された。Daino Tile 淡路島工場技術研究所の深井明比古上席研究員によると、淡陶の「D」と会社の「K」のイニシャルで、大正十四年は淡陶の阿万工場と福良工場が稼働しており、いずれかの生産品という。深井上席研究員の分類によれば、C4タイプで、生産時期は大正時代中頃と考えられ、南あわじ市の田中萬米邸(大正七年建築)の風呂場に使用されているものと同じという。C4タイプの生産は大正時代中頃と考えられ、古澤家が、大正十四年竣工なのでタイルの生産時期と少し差が出るという。ただ生産記録もなくストック品を使用することもあり、建築年代のはっきりしている建物とタイルの関係

を示す貴重な史料と判明した。

天然スレート葺きの屋根は組み合わせて一部を復元した。建物の基礎に使われていたレンガも回収。今回の解体時の調査の結果、レンガの基礎に加えて分厚いコンクリートで基礎が補強されていたことが分かった(写真5)。そのことが阪神・淡路大震災の揺れにも耐えられた理由だろう。大正十二年に起きた関東大震災を教訓に耐震を考えた設計にしたのだろうか。

建築当時の写真も収集

今回の調査では、大正十四(一九二五)〜十五年ごろ撮影した棟上げの写真(写真6)、竣工後の家族写真(写真7)が含まれている。これまでもほとんど公開されていない貴重な写真資料である。またアルバムの中には施主古澤平作(写真8)や暖炉前のソファに腰かけた外国人の写真があり設計者のラディンスキーとみられる(写真9)。川島智生・神戸情報大学院大客員教授によると、ラディンスキーは一八八一年生まれのロシア人で、ウクライナのキーウ(キエフ)工科大で建築学を学んだあと、一九一九年〜三二年ごろまで神戸にいたという。しかし詳しい経歴や活動の詳細は不明。風貌も知られていなかった。

古澤家住宅を建築した古澤平作の長男一は昭和十一年に十七



写真5 レンガに加えて分厚いコンクリートの基礎



写真7 竣工直後の庭での家族写真(上)と景観(下)

歳で亡くなっているが、生前ラディンスキー邸を描いた絵画を残している。この絵画も寄贈され公開している。古澤一は写真撮影も趣味で、自分で撮影したアルバムを残していることも今回判



写真6 棟上げの写真(大正14年4月)



写真9 設計者のラディンスキーとみられる写真



写真8 施主古澤平作

している。設計図と完成した建物とは一部食い違いがあり、今後の研究課題である。

文化財として高い評価の一方で支援薄く

平成十年（一九九八）十月に国の文化財審議会が古澤家住宅の主屋と付属屋を国の登録有形文化財とするよう答申した。登録有形文化財（建造物）は、阪神・淡路大震災をきっかけに、建造物の緩やかな保護に向け、平成八年に導入された。築五十年以上の優れた建築物を対象で、このとき兵庫県内でも登録文化財になったのは神戸市中央区の異人館・うろこの家（旧

明した。焼付サイズが小さいものが多く不鮮明な作品が多いのが残念だが、ラディンスキー邸を撮影した未公表の写真（写真10）が含まれ、これも今回の調査の大きな成果で、併せて展示している。

このほか古澤家から寄託された設計図も展示している。

ハリヤー邸）。

海岸ビル、富永家住宅の主屋と付属屋（東灘区）、など十件だった。いずれも神戸を代表する洋館である。

また明治三十三年（一九〇〇）

に建造された日本最古の重力式

ダムである市水道局の布引五本松えん堤（中央区の布引ダム）、千刈えん堤（北区）・鳥原立ヶ畑えん堤（兵庫区の鳥原ダム）、川崎重工業神戸工場第一号ドック（中央区）、など有数の産業遺跡も登録された。これだけでも古澤家住宅の価値の高さがうかがわれる。

また平成二十一年には「ひょうこの近代住宅一〇〇選」にも選ばれた。神戸・阪神地域に残るデザインの優れた洋館を地域づくりを生かそうと県が定めたものである。住民から推薦があった二〇三〇件の中から県住宅審議会小委員会（委員長 小森星児、神戸山手大名誉教授）が選定した。東灘区では古澤家住宅以外には旧乾家住宅・香雪美術館・富永家住宅・旧高嶋家住宅・翠嵐房が含まれている。

さらに平成二十三年には神戸市の「景観形成重要建築物等」



写真10 ラディンスキー邸

に指定された。市は昭和五十三年（一九七八）に市都市景観条例を制定。地域の象徴となっている歴史がある建築物を選定し、保全・活用を図るを目的にした。市内の近代洋風建築物十三件に続く指定である。

文化財としての価値は高まっていたが支援は必ずしも十分ではなかった。国の登録有形文化財は、指定文化財と違い届け出制で指導・助言が基本になっている。内部の改装が可能で、一方、補助は限定的。所有者による自主的な保存活用が中心で、解体を止めにくい。「ひょうごの近代住宅一〇〇選」も、専門家から保全のアドバイスなどを受けられるが財政支援はない。

古澤家では、令和四年末に当主の喜代司さんが九五歳で亡くなり、息子の弘さんは尼崎市に居住しているため空き家になった。土地が借地のうえ、建物の引き受け手もなくやむなく解体を決めた。

おわりに

深江文化村で守り続けられてきた古澤家住宅が解体されてしまったことはとても残念だが、史料館があったからこそ、神戸市文化財課との調整を経て貴重な部材を保存することができた。現物を保存したことで、浴室タイルの製造元が判明し、大正期のタイルの製造や流通の解明の貴重な史料になった。ほかの部材も将来、化学分析も可能になるだろう。

古澤家住宅とは直接関係がないが、深江文化村の滞在者には、ロシア革命で亡命してきた音楽家ルーチンやメッテルらがあり、朝比奈隆・服部良一・貴志康一・大澤壽人ら、若き日本人音楽家と交流が生まれた。深江文化村が「関西音楽のふるさと」と

称された所以である。大澤壽人に関しては、神戸女学院の生島美紀子先生やご子息の大澤壽文氏と知己も得て、大澤壽人の資料集などを入手し、展示している。前年に続き田中尋氏からメッテル関係の資料の寄贈もあり、本誌で吉康德研究員が報告をしている。小稿と併せて参照していただきたい。

◆予約図書サービス、過去最多更新

令和五年度（二〇二三）の史料館での神戸市立図書館の予約図書受取や図書返却サービスは、貸出冊数月平均一五一〇冊、返却冊数は一五四七冊、貸出を利用した人数は月平均五四四人だった。いずれも前年比一・二倍となり過去最高を更新した。年間合計では過去最高だった二〇二一年と比べ貸出で二四八七冊、返却で二四一六冊上回った。毎月の人数・冊数は表の通り。

（文責・大國正美）

2023年度の図書利用

月	貸出		返却
	冊数	人数	
4	1688	616	1740
5	1293	460	1311
6	1392	501	1472
7	1683	605	1757
8	1227	466	1332
9	1544	525	1513
10	1569	548	1670
11	1353	518	1397
12	1569	558	1457
1	1401	532	1490
2	1556	539	1534
3	1845	661	1902
合計	18120	6529	18575
平均	1510.0	544.1	1547.9



図1 京大オーケストラの
第21回定期演奏会パンフレット

深江文化村ゆかりの 音楽家の演奏記録について

研究員 有 吉 康 徳

「生活文化史」五一号では、「深江在住音楽家の演奏記録について」ということで、一九三六年六月十四日に大阪朝日会館で行われた京大オーケストラ定期演奏会のパンフレット（以下、「一九三六年パンフレット」という）を紹介した。このたび、一九三六年パンフレットを寄贈いただいた菅屋市にお住いの田中千尋さんから、新たに深江文化村にゆかりのある人物の演奏会のパンフレット資料を、二点寄贈いただいたことから紹介する。

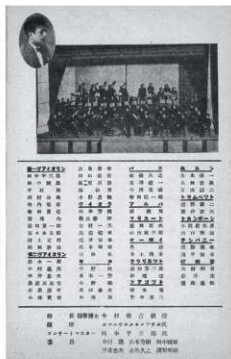


図2 出演者一覧

一点目は一九三一年十二月四日に京都公会堂で行われた京大オーケストラ第二十一回交響管絃樂定期大演奏会のパンフレットである。指揮者はエマヌエル・メツテルだった。メツテルの略歴については「生活文化史」五一号において紹介しているため割愛するが、一九三三年版の「音楽年鑑」において、メツテルの居住地は「中山手通二の三六の七」と記載されていることから、この演奏時はまだ深江文化村に居住してなかったことがわかった。後に指揮者として名を成す朝比奈隆がヴィオラ奏者として出演している。朝比奈は前回紹介した一九三六年の京大オーケストラの定期演奏会ではヴァイオリンで出演していた。

また、このパンフレットは曲目だけでなく、曲目の解説、エッセイ等、様々なことが二〇ページ以上にわたって掲載されている。

ヴァイオラ
山本芳樹
朝比奈

朝比奈隆も出演

るが、このうち京大オーケストラの一九三二年の十一月二日から十二月二日までの活動を紹介している「ジントラの日記」というコーナーが興味深かったことから一部抜粋する。

十一月二日(月)第二十一回定期演奏會を公會堂で開く。満員の盛況なり。會後四條八百政にて慰勞會を催す。席上、親爺(メツテルのこと)に「何か一つ」とテールスビーチを求めむれば、曰く「わたし怒る事よりほか何も知りません。まだあります。皮肉」と。蓋し、遜辞なりと雖も、又至言ならんか。

メツテル自身も厳しい指導を自覚していたことを示す一方、学生たちはメツテルを「親爺」と呼び、敬愛している様子がかがえる記載である。

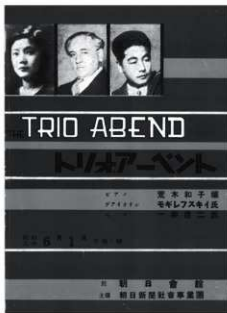


図3 トリオアーベントのプログラム

二点目は一九三四年六月一日に大阪の朝日会館で開催されたトリオアーベントのプログラムである。ピアノは荒木和子、ヴァイオリンはアレクサンダー・モギレフスキー、チェロは柳信二と記載されている。

アレクサンダー・モギレフスキーは一八八五年に現在のウクライナのオデーサに生まれた。ロストフの音楽学校とモスクワ音楽院を卒業後、ヨーロッパで活躍したヴァイオリニストである。一九二〇年代後半に来日し、東京音楽学校などで教鞭をとり、一九五三年に日本で亡くなった。モギレフスキーは、深江の文化ハウスをたびたび訪れたアレクサンダー・ルーチンの異父弟にあたりとされる。拠点は東京であったが、ルーチンが住んだ神戸にも足を運び、深江文化ハウスの前で弟子の諏訪根子や宮本政雄と一緒に撮影した写真が残されている。

ピアノの荒木和子は一九一一年生まれで、一九二九年にドイツに留学し、一九三三年に帰国後、関西を代表するピアニストとして活躍した。戦後は国立音楽大学や熊本音楽短期大学の教授を務めた。兄弟の荒木元秋は、エマヌエル・メツテルの指導する京大オーケストラに所属しており、昨年寄贈いただいた一九三六年パンフレットにおいて、第二ヴァイオリンの演奏者の中に名前が掲載されていることが判明した。

チェロの柳信二氏は、一九〇二年生まれで、神戸二中を卒業後パリに留学していた。一九三三年版の『音楽年鑑』では住吉村に居住していたが、一九三九年版の『音楽年鑑』では住所が渋谷区に変わっており、この間に東京に転居したようである。柳信二は、音楽家だけではなく詩人として著作も残しており、

深江文化村を訪れていた詩人の竹中郁と親しかったようである。また、妻の一柳光はピアノニストで、先述のルーチンに師事していたこともわかった。

以上、少し調べただけではあるが、様々な人間関係において、深江文化村にゆかりのある人物、特にルーチンとメッテルが音楽界で大きな存在であることが改めて認識できた。引き続き、調査を続け、深江文化村の果たした役割を発信していきたい。

【参考文献】

小野高裕「古き佳き芦屋の音楽ロマン」一九九二年

小野高裕「芦屋文化村物語」一九九四年

岡野弁「メッテル先生」リットーミュージック、一九九五年

本庄村史編纂委員会「本庄村史 歴史編」二〇〇八年

ポダロコ・ビョートル「白系ロシア人とニッポン」成文社、

二〇一〇年

阪神間モダニズム展実行委員会「阪神間モダニズム」淡交社、

一九九七年

【参考】

『音楽年鑑』昭和八年版、昭和七年十二月刊行

エマヌエル・メッテルの住所は中山手通二の三六の七、一柳信二

の住所は兵庫県武庫郡住吉村兼松、一〇の二九

『音楽年鑑』昭和十四年版、一柳信二の住所は渋谷区猿樂町四

『音楽年鑑』2（6）一九四二年六月刊行、アレキサンダー・モ

ギレフスキー「ある提琴家の憶ひ出」

深江文化ハウス居住者健在

研究員 有 吉 康 徳

深江文化村の南西の旧小寺邸の隣にある現在の太田酒造の敷地内に、長期滞在宿泊施設とレストランを兼ねた「文化ハウス」という洋館があったことについては、これまでも小野高裕氏や森口健一氏により触れられている。また、芦屋市立美術館博物館に保管されている洋画家福井市郎氏が描いた「芦屋浜風景」には、文化ハウスが描かれている。このたび、幼少期を文化ハウスで生活された村上公敏氏から話を伺うことができたため、その内容を紹介したい。

村上氏は、一九三三年生まれで、福井市郎氏が「芦屋浜風景」を描いた年にあたる。文化ハウスを経営していたのは村上氏の伯母の夫、松浦幹一氏で、松浦夫妻と村上氏の一家は共に文化ハウスで生活をしていた。



図1 福井市郎画（芦屋市立美術館蔵）
左端が文化ハウス



図2 昭和10年代前半の深江文化村～文化ハウス附近

文化ハウスは、元々ドイツ人が建てた建物を長谷川病院が購入して別荘としていたものを、松浦幹一氏が賃借して貸別荘を始めたそうである。これには、松浦幹一氏が現在の愛媛県今治市の大三島において旅館の跡継ぎとして育ったことが背景にあるものと思われる。文化ハウスには、部屋が一〇室程度あり、五月から八月頃まで外国人が入れ替わり滞在していた。当時深江では地引網漁が盛んで、滞在していた外国人が物珍しそうに見物に来ており、漁師は邪魔になると怒っていたというエピソードもお聞きした。

文化ハウスについては、一九三八年三月の本庄小学校卒業生が作成した地図では、「松浦文化ハウス 洋食仕出し」と記載されており、深江の住人には洋食の仕出しの印象が強かったようであるが、実態としては貸別荘がメインの事業で、外国人が多く訪れていたため洋食を提供しており、仕出しはそのついでに行っていたのが実態であったことである。

一九三四年の室戸台風で文化ハウスは大きな被害を受け、一九三八年ごろ松浦幹一夫妻と村上氏の一家は、芦屋市松浜町の芦屋文化ハウスに転居した。芦屋文化ハウスに転居後、松浦幹一氏は仕出し屋をやっていたが、戦後どのようになったのかはわからないとのことであった。

深江文化ハウスが営業していた期間についてはわずかな数年であったため記録に乏しいが、ルーチンをはじめとするロシアから亡命してきた音楽家だけではなく、彼らに会うために山田耕筈、近衛秀麿等も集い、その後の影響に鑑みるとその存在意義は大きかったと思われる。

【参考文献】

- 山形正昭「芦屋「文化村」の記」『大阪芸術大学紀要（芸術）』六、一九八三年
 小野高裕「古き佳き芦屋の音楽ロマン」一九九二年
 小野高裕「芦屋文化村物語」一九九四年
 岡野弁「メッテル先生」リットーミュージック、一九九五年
 本庄村史編纂委員会「本庄村史 歴史編」二〇〇八年

江戸時代の正寿寺(2)

戦禍・震災を免れた梵鐘

史料館長 大 国 正 美

はじめに

正寿寺の梵鐘は、宝暦四年(一七五四)三月十五日の銘がある江戸時代のものである。鑄造したのは当時大坂を代表する鑄物師の大谷正次であった。この梵鐘は戦時中の金属供出、震災、震災をくぐり抜けて守り抜かれた貴重な地域遺産でもある。

正寿寺に残された記録によれば、歴史考古学研究会理事の木武氏が昭和五十六年二月八日に調査をした。しかし公表された形跡が見当たらないうえ、判読に一部脱落がある。また「本庄村史」では梵鐘の存在を紹介しているのにとまっている。

このため改めてこの梵鐘の再調査を行った。調査で大谷正次の子孫を探し、系図や当時の鑄造所の絵図の写しなどの提供も受けた。本稿では、梵鐘の銘やこの梵鐘の作者、作られた場の絵図も紹介した。大谷家の居宅平面図や隠居所は初公開と思われる、今後の鑄物師研究にも有益と考える。

梵鐘の銘

梵鐘は縦帯で四区に区分され、次の銘文が刻まれている(一区、四区の改行を/で示し追い込んだ)。

(一区) 経曰

其佛本願力/聞名欲往生/皆悉到彼國/自致不退転

(縦帯) 南無阿彌陀佛

(二区) 銘曰

佛所遊履/國邑丘聚/靡不蒙化/天下和順/日月清明
風雨以時/災厲不起/國豐民安/兵戈無用

(縦帯) 崇徳興仁/務修礼讓

(三区) 願主 当邑 中綱氏弥三右衛門

智正/妙真 釋勝圓/釋信教/釋可善
法名 釋教信/釋妙信/釋妙光

(縦帯) 假命盡十方无尊光如来

(四区) 撰劄兎原郡/本庄深江邑

長井山正壽寺/當住持/理傳

治工大坂住/大谷相模掾藤原正次

(縦帯) 宝暦四甲戌歲三月十五日

一区と二区に刻まれているのは、浄土真宗が根本聖典の一つとした「仏説無量壽經」の一節である。葬儀や仏事はすべて仏恩に対して報謝の生活を送ることを勧める内容で、一区は「阿彌陀仏の本願力により、南無阿彌陀仏の名号を聞いて往生を願えば、誰しも極楽に往くことができ、おのずと不退転の位となる」という意味。第二区は「仏が巡り歩んだ国や村はその教えに導かれない所はない。天下は平和で、太陽も月も明るく輝き、風も雨も適切で、災害や疫病などは起こらず、国は豊かで民は平穩に暮らし、兵も武器も必要がない。続く縦帯にはそれに続く経文で「人々は徳を尊び、思いやりの心を持ち、努めて礼儀を重んじ、互いに譲り合う」とある。

第三区は、深江村の中綱弥三右衛門が願主となり八人の門徒



図1 正寿寺梵鐘 寄進者銘



図2 梵鐘の陰刻銘

次であることが刻まれ、縦帯には宝暦四年三月十五日に铸造されたことが記載されている。

大坂の鋳物師・大谷正次

鋳物師大谷家については、坪井良平氏の「大阪の鋳物師大谷家の累代」(私家本、一九七四年)、および天岸正男氏の「大阪の鋳物師と真継家」(『歴史考古学』一四号、一九八四年)の先

が協力したとある(図1)。ほかの文字がすべて陽鑄なのに対し「智正妙真」の文字だけは陰刻で铸造が終わった後に刻み込まれたことが分かる(図2)。

三区と四区間の縦帯の「帰命盡十方無碍光如来」は「十字の名号」とも言われ、「十方を照らし妨げのない光の仏にお任せする」という意味で、一区と二区間の縦帯にある南無阿弥陀仏と同じ意味になる。

第四区は铸造当時の住持が理伝、また治工は大坂住の大谷相模掾藤原正

行研究がある。両者によれば、大谷家は家国系と正次系の二流があり、正次系初代は大谷善右衛門正次と名乗り、文禄四年(一五九四)に死去した。五代徳兵衛正次が元和三年(一六一七)に相模掾の宣旨を受けた。

天岸氏は同論文で、現存・佚亡を含めた梵鐘・半鐘・燈籠などの銘文から判明する鋳物師を住所別に紹介している。この中で大谷正次系の一〇代までの遺例は不明として、十一代兼太郎正次・十四代吉兵衛正次・十五代忠兵衛尉吉久・十六代勘兵衛正次(号孝寿堂)・十七代吉右衛門正次・十八代惣兵衛正次(号・晴英)・十九代和助正次・二十代左衛門正次・二十一代善兵衛正次(号・銅翁)の作品が確認されるとしている。

正寿寺の鐘を铸造した正次は、十七代目に当たり、作品が最も多い人物である。

大谷正次系の系図

大谷正次の子孫は現在も大阪で铸造所を経営しており、三代大谷秀一氏(昭和八年生まれ)から「大谷家系図」を拝見する機会を得た。坪井氏の見た過去帳と十四代十五代が若干食い違う。

この系図は昭和前期、先々代の二十八代隆義氏が天王寺で市を開いていたとき、近くで足袋屋を営んでいた稲村重兵衛から写しを譲られたものだといふ。稲村重兵衛の番頭が市に掲げられた大谷相模掾の看板を見て、系図提供を申し出たと伝える。

その系図によると、十七代吉右衛門正次は、宝暦二年(一七五二)二月二十七日相續、寛政五年(一七九三)十月二十五日六十七歳で亡くなったとあるので、享保十二年(一七二七)生

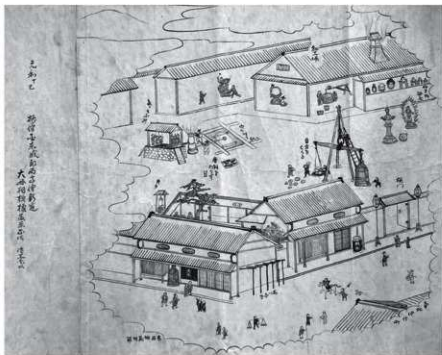


図3 大谷相模推藤原正次治工処

まれとなる。主な作品として、天王寺の清水寺梵鐘、生玉前寺の隆専寺梵鐘、上本町天性寺梵鐘、中寺町の本経寺梵鐘、淀川本庄の教恩寺梵鐘、有馬の温泉寺梵鐘、大和吉野山の竹林寺梵鐘、淡路塩田村の普門寺梵鐘、大和大峰山の東行場不動明王・

蔵王権現、大峰山福村ヶ嶽の大日如来、南河内伊賀村の長泉寺梵鐘を列挙している。天明二年（一七八二）六月二十四日に十八代徳兵衛晴英が相続しているので、十七代相模掾としての活動はちょうど三〇年間となる。

描かれた鋳造所とその位置

大谷秀一氏は三点の絵図を所有されている。二十六代目の治三郎正峯（明治三十一年相続、大正十年歿）か、二十七代目の秀次郎（明治三十五年相続、昭和八年歿）ごろに、明治維新で高津地区から移転する前の様子を聞き伝えによって描いたものという。

図3は「元和丁巳 摂津国東成郡西高津新道 大谷相模推藤原正次 治工処」と表題が書き込まれ、この図は全日本建築士会発行の雑誌「住と建築」四五七号（一九九八年）で紹介されたことがある。

図3によれば、東西通りの地蔵筋が正面で「大谷」の暖簾を掲げている。中央の左側で「たたらふみ」が行われて「唐胴をわかす」「穴に形を納め」の書き込みがある。奥の細工所では部分で鋳造した部品を組み立てたり、仕上げをしている。南北通りの仲仕町に面して横門があり、その近くでは出来上がった梵鐘の「目方をはかる」作業をしている。「元和丁巳」は相模掾の宣旨を受けたとされる元和三年（一六一七）であり、その年の治工所を想像して作成されたと思われる、原因があつたのかどうかは不明だが、近世の鋳造の工程が判明する。

図4は「宝暦時代」と書かれた大谷治工場の位置を示した絵図で、正寿寺の梵鐘を作成した時期の状況を推測した絵図であ

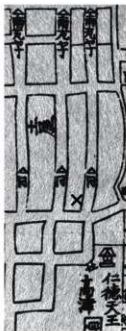


図5 大阪全区
(天保年間)

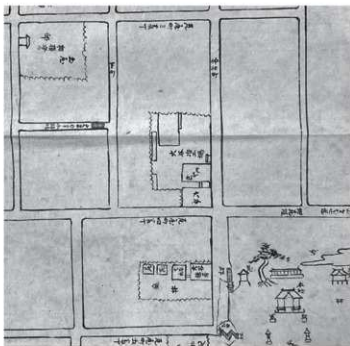


図4 宝暦年間の大谷治工場

る。高津宮の通りを挟んで「大谷隠居」とあり、宝暦二年（一七五二）に家督を譲り、安永八年（一七七九）に亡くなった

十六代勘兵衛正次の居宅だろうか。離れ、蔵が二つ、井戸と庭があった。地藏坂通りを挟んで北側に本宅があり「大谷・はなれ・大谷治工場」と書き込まれている。通りを挟んで西には土屋相模守邸がある。常陸国（現茨城県）土浦藩主土屋政直が貞享元年（一六八四）に大坂城代となり、この地に蔵屋敷を与えられた。現在は大阪中央小学校の敷地に「土屋相模守蔵屋敷跡」の石碑がある。この位置を「天保新改 大阪全区」で高津神社と土屋相模守邸をもとに確認すると、図5の×印の位置に当たる。現在も地藏筋の名称は残っていて、位置が判明する。

大谷家の邸宅平面図

図6は年代がないが、大谷家の立地を示した絵図と、邸内の平面図を組み合わせて一枚の絵図としている。邸宅の位置関係は図4と一致、また土屋相模守邸の位置も一致している。図4の「大谷隠居」が図6では「大谷別宅」と変化し、近隣の居住者が書き込まれている。大谷家は鳥羽伏見の戦いあと、天王寺に移転しており、図6は近世の様子を回顧して描いた絵図だろう。屋敷の平面図によれば、南側から店、奥に三室あり一室には仏壇。左手には板の間の飯室があり、店と家族の居住空間である。

東の通りに面して大谷東ノ入口があり、ここから入ると別に玄関がある。表ノ間・中ノ座敷・奥座敷につながっている。奥座敷には「二階ハ西向、兵庫・六甲山見晴シノ大座敷也」と書き込まれていて、二階には六甲山を望む大座敷があった。上得意の客をもてなしたのだろうか。

大谷東ノ入口の北には、大谷鋳物工場に出入りする大谷ノ門

がある。タタラと大穴・天平(秤)は図3の図と同じ位置にある。鋳物工場の中にはフイゴとロクロ場、鋳物仕上場は別の建物だった。

おわりに

明治維新の廃仏毀釈で、寺院は厳しい弾圧を受けた。正寿寺の梵鐘は、その難を逃れて守られ、戦中は金属供出の危機に遭遇した。現在の輔信勝住職が祖父の円准(昭和八年住職補任、昭和四十八年遷化)から直接聞いた話によれば、金属供出を求められ「運べないので取りに来るなら提供する」と答えたが、結局取りに来ることはなかった、

という。「供出すると材質を調べるために穴をあけられるが、それもなかったで助かった」とも話していたという。

供出は免れたものの、空襲で寺は全焼、鐘樓も焼け落ちた。本尊、過去帳、蓮如上人筆と伝える「南無阿弥陀仏」の六字名号の軸を持ち出すのが精いっぱいだった。再建したものの平成七年の阪神・淡路大震災でも鐘樓は全壊した。度重なる災難にも梵鐘は生き残った。まさに奇跡である。

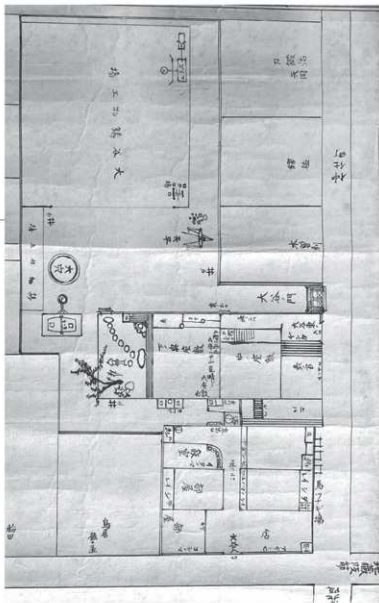


図6 大谷家平面図

今回の調査で、この梵鐘は、十七代大谷正次が、家督を継いで二年目、二十代後半の最も精力あふれる時期に製作した梵鐘と判明した。製造した場の景観も判明し、多くの人の願いが込められた梵鐘であることが改めて確認できたように思う。

なお執筆にあたって、正寿寺の輔信勝住職、大谷相模接鋳造所の大谷秀一監査役にご教示を得た。末筆ながら厚くお礼申し上げます。



図1 明治43年ごろの深江
浜街道から分岐して南側に新道



写真1 新道 岡田善蔵宅の南側附近

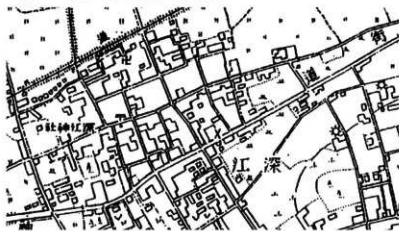


図2 大正12年ごろの深江
新道が「街道」となり浜街道より太く描かれている

深江の心象風景（4）

深江周辺の風景

筆者 岡田茂義

十七、新道を走る馬車型自動車

頃は第四十九号に記載されている明治天皇崩御の前後、即ち明治時代の終末期である。新道をオープン型の馬車にエンジンをつけた様な自動車が走って来る。我々子供達（何れも六、七才位）は先を競って車と共に一緒に走る。運転手の外国人が鞭を振って、我々を振り払おうとする。一度その鞭が顔に当たって痛かった思いが今も記憶に残っている。

当時天皇陛下は行幸の際、数頭立てのオープン馬車をこ使用

になった。その後自動車に変えられたが、各国大使が新任挨拶のため宮中へ参内する時は宮内庁所属のこの馬車を使用して自動車の流れの中を悠々と走らせているのを見た。

十八、横屋のゴルフ場

新道の風物につき一件書き添える。青木と魚崎との間に新道に沿って大きな草原があった。地名は横屋と呼んで、そこには一軒の家も無かった。

遙か南を眺めると向うの海岸にはスタンダードの煉瓦造りの石油貯蔵倉庫があった。それと新道との間の広漠たる草原がゴル

当時六甲ゴルフ場は既にあつた様だ。後記してある「六甲ゴルフ場」に記載の「短い鉛筆」に依ると、明治三十四年英国人知らないが六甲と並行して存在し、而も完備しない。らしきゴルフ場であつたので、古くとも日本最初のゴルフ場とは云い難い。又、そのあと横屋に甲南ゴルフ場が出来ている。同じく「短い鉛筆」による。南郷三郎（ゴルフ界の重鎮）等によるものと思う。或期間この名前の下でその草原が利用されていた様だ。

十九、六甲ゴルフ場

南郷茂宏「短い鉛筆」によると英国人グルームによって、六

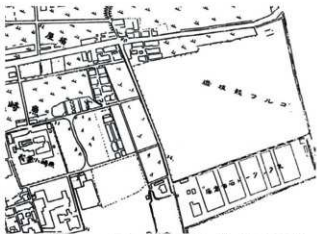


図3 横屋ゴルフ場とスタンダード石油（「魚崎町誌」）

甲山になっていて、スタンダードの人達がプレーした。小学校初年級の我々の友達も、時々このコースのロスト・ボールを拾って学校に持って来る。皆、歓声を上げて喜び、ボールを切り開いて中のゴム糸を取り出し各人に分け合つた。これが皆の竹製模型飛行機のプロペラを廻すゴム糸となつた。

甲山上に日本で初めて四ホールのゴルフ場が造られた。彼は明治元年二十二才の時来朝し、ゴルフ場を造る数年前に六甲山最初の別荘を建てた。六甲山の開拓者でもある。その後、社団法人神戸ゴルフ倶楽部として日本人も入会させ、明治四十年には、一八ホールをオープンしたと記載されている。然し、戦後私がプレーした時は二、三ホールの不足があつたことを記憶している。峻しいホールを使用していなかつたのかも知れない。

外国人により創設されたゴルフ場であるので、クラブ・ハウス内の表示も日本離れしたものがたくさんあつて戸惑つた。W・Cの表示の所が、正式にウォーター・クロセット（Water closet）と書いてあるので便所とは思えなかつた。今でもそれ等の難しい表示が残っているだろう。持ち運ぶクラブの呼び方も同様で



写真2 神戸ゴルフ倶楽部（絵はがき「六甲山上ゴルフ遊戯場」昭和7年改修前の初代倶楽部ハウスが写っている



写真3 六甲山の籠昇き（絵はがき「有馬六甲山道」）

を底に張り付けたからとある。「何かちよつとした思いつきで愛称が始まったように思われる。」と書いてあった。

尚、「マッシー」とは伊達男、「ニブリック」は醜男の意味であることも面白く付記されていた。

六甲ゴルフ場でプレーするメンバーは籠（荷い籠）で山上まで担ぎ上げてもらった。この籠昇きの一人が有名なプロゴルフアーになった。宮本留吉である。彼は日本オープンを六度制覇し、全米チャンピオンのピリー・パークとプレー・オフ、ボビー・ジョーンズにも勝った記録を持っている。ゴルフ界のリーダー赤星六郎のコーチを受けた。

ドライバーは W・1、スプーンは W・3、ブラッシーは W・4、マッシーはアイアンの 5、マッシー・ニブリックはアイアンの 8、それにバターと計六本くらいで廻つたのだろう。我孫子ゴルフ場の会誌によると driver は飛ばす club、spoon はその形、バターの擬音、ブラッシーは bras（dress、真鍮）

二十、大阪湾を往復していた貨物運搬船

深江の浜から沖を見れば、いつも黒い貨物船（艇型の運搬船）が西へ東へと往來していた。神戸港と大阪港を連絡する運搬船でその往來は絶えなかった。

当時工場のあらゆる機械は総べて蒸気機関で動かした。その燃料は石炭である。大阪へ行く時阪神電車で淀川の鉄橋を渡ると途端に空が曇る。この地区の数多い中小企業の工場に林立する煙突からの煙によるものであり、その燃料の石炭は何れも九州、四国、或は輸入されたものを神戸港で運搬船に積み替えて大阪港に運んだ。

当時、日本の輸出品の第一位は二位と格段の差で綿製品であった。鉄鋼製品は、まだ輸入の段階であった。大阪地区は東洋紡、日本紡、呉羽紡等の根拠地であり、これ等の工場の製品は何れもこの運搬船で神戸港に輸送され、大型船舶に積み替えて総て中国へ輸出された。

この様に往復の貨物が多量に存在したので運搬船も数多く、後から後へと続いて姿を現していた。因に鐘紡はその拠点を關東の鐘ヶ淵から神戸に移した。

二十一、自作農の経験

並びにその時の台風に関連しての鶴塚

戦争と共に食糧事情が逼迫して、年貢として納まっていた米俵が金納に変わって行った。已むを得ず自作農を考え、偶々小作に出してない一畝（三十坪）程の小さい田圃（田地）が残っていたので、これに水を引入れ苗を植えて丁寧に草取りも続けた。昭和二十年終戦の年である（昭和十九年の記憶違い以下、



写真4 鶴塚
(天保7年「摂津名所旧跡細見大絵図」)

台風の名称も同様で、茂義氏自身の補注参照)。処が、有名なジェーン台風の襲来で稲が皆倒れ全滅した。翌年、これ又室戸台風の直撃を受け、田に海水が入り丁度穂に花が付いた時であったので花粉が散ってしまい、二、三日後穂が白く変わり枯れた。その明るる年、昭和二十二年漸く儼かながら収穫することが出来た。

室戸台風と云えば次の様な思い出がある。芦屋の業平橋に鶴塚と云うのがある。鶴が黒雲に乗って稲妻を光らせ、雷音を轟かせて御所の屋根に飛び乗って来た。

源三位頼政が暗い闇の中、すかさず強弓を以て矢で鶴を射落とした。大きな音を立てて屋根から転り落ちたので、家来の猪の早太が真っ暗い中を音の方向に走って行った処、思わず左近の桜に突き当たったが、駆け寄り鶴の首を打ち落とした。死体は桂川に捨てられ、流れ流れて芦屋の浜に打ち上げられ、鶴塚

となった由来がある。

室戸台風襲来の時、京都の奥にある清滝も大きな被害を受けた。旅館の従業員が清滝川に流された。その遺体が保津川に流れ込み、桂川を経て淀川に流され遂に海に入る。これが海流に乗って芦屋の浜に打ち上げられた。

芦屋の浜に打上げられて鶴塚となった不思議な漂流コースの実証が、この室戸台風による清滝からの漂流事実を以て現実に証明された。これは学友故安村慶次郎君の実証であり信すべきものと思う。業平橋は今海辺より遙か上の方にあるが昔はこの辺りまで海辺であったのかも知れぬ。

註 この度拙書をご覧下さって訂正すべき箇所の参考資料(国立天文台編理科年表)を送ってもらいました。それにより自作農を始めたのは終戦の前年昭和十九年とし台風の呼称を次の通り訂正いたします。

ジェーン台風 昭和十九年十月七日 台風(呼称なし)

室戸台風 昭和二十年九月十七日 枕崎台風

昭和二十一年は台風襲来無く収穫することが出来ました。

当時我々の中学校の教育は受験勉強だけのものでなく、人格養成を重視して訓練するところであった。その中には円満な人格を作るために笑いの部門も設けていたのだらう。狂言・川柳・狂歌などが国語の教科書の中に出て来た。

その暗さ早太桜に突き当たり

既に記載した通り猪の早太が大きな音を立てて射落とされた鶴を捕らえようと前後を忘ずる間の中を走り、暗さのため思わず左近の桜にこれも大きな音を立てて突き当たった（鶴は梅若謡本第一七巻参照）。中学生にユーモアのセンスを教え込む狙いである。この読本には早太の川柳の次にこの狂歌が続いていた。

早太が握り拳を振り上げて

山の横面春風ぞ吹く

狂言では大藏流の茂山師の狐の出る狂言「釣り狐」を講堂で演じてもらった。子狐がキョキョと叫びながら飛び廻る。これを真似て廊下をキョキョと飛び廻ったことが記憶に残っている。平成六年（一九九四）七月一日（火）「朝日新聞」天声人語に「川柳が高校の国語教科書に登場するようだ。来年度から使われる教育出版の高校国語Ⅱに作家田辺聖子さんの随筆「川柳でんでん太鼓」が引用され箕面市に住む杉本一本杉さんの川柳が紹介される。（天高く月夜のカニに御座候）」と云う句だ。月夜のカニは月光を恐れて餌をあされないので肉がつかないと、杉本さんは小さい頃父親から教えられた。瘦せていたので月夜のカニともからかわれた。」と記載されている。

漸く川柳が高校の教科書に出て来るようだが我々の中学では既に川柳は狂歌と共に教科書に載っており、ユーモアの育成による人格養成が早くから配慮されていた。

史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇二三年四月〜二〇二四年三月
（二〇二三年）

4月1日 神戸市立図書館の予約図書受取サービスの開始時間を午後0時30分から午前11時からに早める。

6月4日 神戸高低差学会（見学者 一〇名）

6月10日 季節の展示コーナーを「端午の節句」に展示替え

7月16日 戦争を語りつくす会（見学者 四〇名）

8月5日 季節の展示コーナーを「夏の風物詩」に展示替え

9月3日 甲南大学文学部（見学者 一八名）

9月17日 ひょうごプレミアム芸術デーに協賛し、田中邦彦画伯の作品を展示

10月1日 本山南婦人会（見学者 一三名）

10月17日 季節の展示コーナーを「中秋の名月」に展示替え

11月1日 企画展示 田中邦彦画伯「東神戸 懐かしの風景展」開始（12月3日まで）

12月3日 本山第三小学校三年生（見学者 九二名）

12月17日 東灘ボランティアガイドの会（見学者 五七名）

12月28日 2階の深江文化村コーナーを拡張し、旧古澤邸から寄贈された資料を展示する。

1月6日 季節の展示コーナーを「正月の風景」に展示替え

1月23日 東灘小学校三年生（見学者 一四六名）

2月30日 福池小学校三年生（見学者 一三七名）

2月3日 季節の展示コーナーを「ひなまつり」に展示替え

資料寄贈者の芳名（敬称略）二〇二三年四月〜二〇二四年三月

山田良子／嘉門千晴／大國正美／真陽小学校／古澤 弘／田中千尋（道谷 卓記）



図① 1962年の深江港 魚屋道起点

田中画伯は、一九二二年（大正十一年）に現在の神戸市東灘区御影石町に生まれ、戦前の旧制中学時代に美術部で絵を描き始めた。建設会社勤務時代も描き続けて、定年後にはバイクに絵の具を積み、夏はテント、冬はユースホステルを利用して、日本だけでなく海外でも

田中邦彦画伯の懐かしの風景画

史料館副館長 道谷 卓

史料館では、御影町石屋生まれの田中邦彦画伯の遺族から、東神戸の懐かしい風景を描いた作品を多数寄贈していただいたので、二〇二三年（令和五）十月一日から、企画展として「神戸 懐かしの風景展」を開催した（十二月三日まで）。

スケッチ旅行を続け、漁村や街道など失われる風景を描き続けた。創造美術協会会員。二〇〇七年（平成十九）三月に、八十六歳で亡くなった。

今回の企画展では、田中画伯が描いた数多くの風景画のうち、東灘区を中心に東神戸の昭和の古き良き時代を描いた作品を遺族から寄贈していただいたので、その中から史料館のある深江地区や、画伯の生まれた御影をはじめ、東灘区から灘区にかけての作品を九点、展示した。このうちの一点①一九六二年の深江港は、十月からの企画展に先立ち、「ひょうごプレミアム芸術デー」に協賛して、七月から先行展示したものである。この「一九六二年の深江港 魚屋道起点」は、埋め立てが始まる前の深江の浜で、漁業が盛んに行われていた頃の様子を描いている。

十月からの企画展では、①のほか、②「深江漁港と商船大学進徳丸」（東灘区深江南町五丁目）、③「灘魚崎郷」（桜正宗、一九六二年、同区魚崎南町四丁目）、④「御影浜街道」（同区御影本町六丁目）、⑤「御影浜街道」（同区御影本町八丁目）、⑥「石屋川河口」（泉勇之介商店、一九九二年、同区御影石町一丁目）、⑦「酒蔵」（白鶴酒造石屋蔵、同区御影石町一丁目）、⑧「新在家の運河」（灘浜運河、大黒正宗、同区御影塚町一丁目）、⑨「小泉製麻」（灘区新在家南町一丁目）の作品を、史料館一階の季節の展示コーナーに展示した。これらの作品は、絵の表や裏に画伯自らタイトルと年代を書いたものとタイトルだけで年代の書かれていないものがあり、年代が書かれていないものについては、少なくとも一九九五年（平成七）の阪神・淡路大震災以前に描かれたものだということ間違いないように思われる。



図② 深江漁港と商船大学進徳丸



図③ 瀬魚崎郷



図④ 御影浜街道（御影本町6丁目）

それでは、②以降の絵について見てみよう。②「深江漁港と商船大学進徳丸」は、年代が記載されていないため、描かれた年は不詳である。ただ、進徳丸が、旧神戸商船大学（現・神戸大学海洋政策学部）構内に陸上船舶として保存されたのが一九六七年（昭和四十二）であること、深江浜の埋め立てにより最終的に深江の漁業協同組合が解散されたのが一九七二年であることから、②はこの間に描かれたものと思われる。③「瀬魚崎郷」は、瀬五郷の酒蔵地帯のうち、東郷とも言われる魚崎郷の代表的な蔵である櫻正宗のレンガ造りの酒蔵（絵の左端の建物）を描いている。一九六二年の年代が入っており、当時の蔵

の外観がよくわかる。ここに描かれている酒蔵の建物は、阪神・淡路大震災で全て倒壊してしまい、酒蔵としての再建はなされなかった。

④から⑦の四点は、画伯の生まれた御影を描いたものだ。この四枚は、描かれた場所が特定できることから、展示では定点観測ができるよう、現在の現地の写真をあわせて展示した。④と⑤の「御影浜街道」は描かれた年代は不明であるが、戦前は本通りと呼ばれていた旧御影町の中心地的な場所である。太平洋戦争の空襲からの被害も逃れ、江戸時代以来の古い街道の街並みが残る一角であったが、これも一九九五年一月の阪神・



図⑤ 御影浜街道 (御影本町8丁目)



図⑥ 石屋川河口



図⑦ 酒蔵 (白鶴酒造石屋蔵)

淡路大震災で街並みが倒壊してしまった。したがって、この二枚の絵も震災前に描かれたものである。④は今でも、震災前の電柱と一方通行の道路標識がそのまま残っているが、絵の中央に描かれた青果店は、住宅になってしまっている。⑤は現在、新しい家が建ち並んで震災前とは街並みが変わってしまったが、絵の中央に描かれた地藏尊の祠は今でも健在である。

⑥「石屋川河口」は一九九二年の作品で、御影郷の泉勇之介商店（一八八二年〈明治十五〉創業）の木造蔵を描いている。この蔵は、阪神・淡路大震災で被災・倒壊した御影郷の酒蔵で倒壊を免れ、震災後も唯一操業していた木造蔵だが、二〇一三

年に廃業し、翌二〇一四年に取り壊され、現在では別の建物が建っている。なお、奥に見える赤い橋（瀧大橋）が、同じ地点だということを示している。

⑦「酒蔵」も描かれた年代は不明であるが、阪神・淡路大震災前の作品であることは間違いない。これには木造の白鶴酒造石屋蔵が描かれているが、この蔵も阪神・淡路大震災で倒壊した。倒壊後、建物は撤去されたが、絵の左下に描かれた波返し（かつての砂浜の名残）は残っていた。その波返しも二〇〇五年に現在の施設を建設するために撤去された。今は、木造蔵の間の道路だけが当時のままである。



図⑧ 新在家の運河

開業したRO
KKO3（ウ
ントワア）の
部として利用
されたが、これ
も阪神・淡路大
震災で倒壊し
てしまった。
今回の展示
では、画伯の
九点の作品を
展示したが、
このほかにも
多くの絵画を
遺族から寄贈

⑧ 「新在家の運河」の作品に描かれた木造の酒蔵は、大黒正宗の銘柄で知られる安福又四郎商店の蔵である。この木造蔵も阪神・淡路大震災で倒壊しており、描かれた年代は不明であるが、阪神・淡路大震災前の作品である。大黒正宗は、今でもこの場所の一部で日本酒を販売するが、蔵の建って行った敷地は商業施設に変わっている。

⑨ 「小泉製麻」は、一八九〇年（明治二十三）六月創業の小泉製麻株式会社（創業時は有限責任会社都賀浜麻布会社）の本社屋として使用されてきた木造二階建ての建物を描いている。この建物はその後、一九九一年（平成三）年に商業施設として

していただいている。史料館では、今後、これらの作品を順次展示していこうと考えている。その際、描かれた場所と年代が特定できるものについては、現在の様子を写真に撮り、定点観測ができるような展示を行う予定である。



図⑨ 小泉製麻（旧本社）

◆研究員の水口千里さん死去 水口千里さんが二〇二三年六月二日病気のため死去した。水口さんは民俗学専攻。「本庄村史 地理編・民俗編」（二〇〇四年）の「神戸深江生活文化史料館について」を執筆、資料の概要や展示解説、史料館の今後の展望を示した。また史料館の展示解説「まちの歴史とくらし」（二〇〇五年）も中心になって編纂した。

編集／大國正美 第52号 2024・3・31
発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

078-45314980

<http://fukae-museum.lacocan.jp/>